

りし、恐しの蜘蛛のふるまひかなと、和尚の物語しといへり、

〔太平記 劍卷〕夏ノコロ、頼光源○瘡病ヲ仕出シ、如何ニ落セドモ不落、後ニハ毎日ニ發ツキケリ、發ツキスレバ頭ベ痛ク、身ホトヲリ、天ニモ著ズ、地ニモツカズ、中ニウカレテ被惱ケリ、加様ニ逼迫スル事、三十餘日ニゾ及ケル、或時又大事ニ發テ、少シ減ニ付テ、醒方ニ成ケレバ、四天王ノ者共看病シケルモ、皆閑所ニ入テ休ケリ、頼光少シ夜深方ノ事ナレバ、幽ナル燭ノ影ヨリ、長七尺計ナル法師スルスルト歩依テ、繩ヲサバキテ、頼光ニ付ントス、頼光是ニ驚テ、カバト起キ、何者ナレバ、頼光ニ繩ヲバ付ントスルゾ、惡キ奴哉トテ、枕ニ立テ置レタル膝丸ヲツ取テ、ハタト切、四天王共聞付テ、我モ我モト走り依リ、何事ニテ候ト申ケレバ、シカトトゾ宣ヒケル、燈臺ノ下ヲ見ケレバ、血コボレタリ、手ニ火ヲ炬トキテ見レバ、妻戸ヨリ簀子ヘ血コボレケリ、此ヲ追行程ニ、北野ノ後ロニ大ナル塚アリ、彼塚ヘ入タリケレバ、即塚ヲ掘崩シテ見ル程ニ、四尺計ナル山蜘蛛ニテゾ有ケル、搦テ參リタリケレバ、頼光安カラザル事カナ、是ホドノ奴ニ誑カサレ、三十餘日惱マサル、コソ不思議ナレ、大路ニ曝スベシトテ、鐵ノ串ニ指シ、河原ニ立テゾ置ケル、是ヨリ膝丸ヲバ、蜘蛛切キトゾ號シケル、

〔古今著聞集 管絃歌舞〕前筑前守兼俊、殿上に笙吹なきによりて、昇殿を免さるべきよし沙汰有けり、先試有ける日、きさき笙を給ひて、ふかせられけるに、用心なくして、吹出しける程に、管中に、平蜘蛛の有けるが、喉にのみ入られにけり、むせてはつきまどひける程に、主上群臣も笑ひ給て、腸を斷けり、

〔長門本平家物語 四〕康頼入道平○是を御覽候へ、此島にはなぎは候はぬに、此葉の出來候はとて、少

將成藤原に奉る、少將取て見て、あら不思議や、今は權現の御利生に預て、都へ歸らん事は一定な

りとして、彌祈念せられけるに、康頼入道申けるは、入道が家には蜘蛛だにもさかりぬれば、昔より必悦を仕候、今朝の道に、小蜘蛛の落か、り候つるに、權現の御利生にて、少將殿召返されさせ給